

論文の内容の要旨

論文題目 地下出版と教養のメディア史——近代日本における教養主義の裏面

氏名 大尾侑子

本稿は近代日本において「低俗文化」とみなされてきた軟派出版、いわゆる「エロ（性風俗）」、「グロ（猟奇、犯罪）」を専門に取り扱った版元とその刊行物——軟派出版——に注目し、教養主義の言説空間との関係性から捉え返すことで、近代日本の知的空間を再考するものである。しばしば近代日本の出版文化は、「エリート＝高級文化／大衆＝低級文化」といった線型的な対応関係によって論じられてきた。こうした思考法が顕著にあらわれているものの一つに、蔵原惟人によって提唱された「岩波文化＝教養主義／講談社文化＝修養主義」という対比構造がある。しかし社会階層と審美判断の構造的相同性という強い前提に立つこの図式は、出版文化と「知」の重層的かつ豊かな側面を捨象するだけでなく、「教養（主義）」概念の理解をも平板なものに閉じ込めてしまう点で批判も向けられてきた。

実際に、このような図式そのものから漏れ出た性や風俗、猟奇といった素材を扱ってきた出版文化は近代社会において教養や知的上昇とは無縁なものとなみなされてきた。それだけでなく、戦前昭和においては検閲制度によって風俗壊乱のレッテルを貼られ、激しい弾圧にさらされてきた。しかし、「正統」な出版文化から逸脱し、周縁的なものとして正視されてこなかった「非正統的な書物」であるがゆえに、それを知と無縁の低俗なメディアに過ぎなかったと断罪することはできない。むしろ、「エロ・グロ」とされるものと「教養」のあいだに断絶を見出すこと自体が、「岩波／講談社文化」という区分同様に非自明的であり、ある特殊な歴史・文化的コンテキストにおいて作られた境界設定といえる。

それを傍証するように、戦前昭和に「珍書屋」と呼ばれた特殊風俗専門の版元は、同時代のプロレタリア文学運動やアヴァンギャルド芸術運動、浅草演劇人脈などさまざまな文化が交差するところに生起していた。プロレタリア文学や変格探偵小説、幻想文学の世界は、人間のグロテスクな肉体を生々しく描写し、嗜虐性や変態性欲性、さらには汚穢に至るまでを鮮明に描くことで、資本主義批判や植民地主義批判、あるいは「正常」、「合理的」人間への盲信という近代主義を批判してきた。これを踏まえれば、「エロ・グロ」という領域は近代的価値観に照らし、タテマエ上「低級文化」と見なされていた一方で、それこそが近代出版文化を貫く極めて象徴的な知の源泉であったとも考えられる。

こうした問題意識から本稿は、近代日本において「エロ・グロ」といった言葉で表現されてきた「非正統的な書物」の世界を対象に、その周辺に広がる知のネットワークと、そこに通底する教養観について検討をおこなう。具体的には梅原北明や酒井潔、花房四郎（中野正人）、斎藤昌三、伊藤竹酔らが集った「文芸市場社」とその周辺の人的ネットワークと、そこに通底する教養観を明らかにすることで、これまで論じられてきた教養主義とは別種のオルタナティブな教養の水脈を示し、社会学のみならず、メディア史、文化批評にも資する知見を得ることを

目指すものである。

以上を踏まえ、梅原北明の「文芸市場社」を中心に分派分裂し、広がりを見せた戦前昭和の珍書屋のネットワークと、そこから発行された特殊風俗文献を分析対象とし、「地下出版界」と呼ぶべき文化圏の消長を論じた。その際、「地下出版界」が他の領域からの自律性を獲得するために用いたコミュニケーションの指標として、①価値：コミュニティ感覚や集団的アイデンティティを作り出す価値観や趣味 taste、②メディア形式：頒布されたメディアの形式的側面、③実践：身体／肉体的パフォーマンスの三点に注目した。本稿は書物や雑誌のテキスト（書かれたもの）のみを分析対象とするのではなく、彼らがこだわりを見せた書物の形式性や、ときに「都市＝街頭」で演じられた身体／肉体的なパフォーマンス性についても同様に地下出版の「界」を形成する重要な構成要素として捉えた。そのうえで、これらの要素を独立したものと捉えず、それぞれが有機的に結びつくものとして扱った。本論文は全9章、補論2章、附録の関連年表からなり、〈第一部〉地下出版界の前史、〈第二部〉地下出版界の成立、〈第三部〉そして衰退という3つの流れを検討することで、これを動態として捉えることを試みる。

・〈第一部〉

まず〈第一部〉では、梅原北明を中心とする珍書屋のネットワークが形成された経緯と、軟派出版へとつながる理念の萌芽について検討した。これらによって明らかになったのは、「軟派出版界の元締め」と呼ばれた文芸市場社が、『文藝時代』から脱退した今東光をはじめ、プロレタリア文学や前衛芸術の村山知義らを擁した雑誌『文党』の超党派的なネットワークを起源としたことである。第2章では、彼らが作家を搾取し資本家となった出版者、そしてブルジョワ文壇への批判を行い、自費出版同盟というオルタナティブな集団を構想したこと。そして第3章では、「芸術」の価値を市場のメカニズムが決定するという「文芸-市場」のメカニズムを、「作家の直筆原稿叩き売り」という身体的なパフォーマンスによって換骨奪胎するさまを論じた。前者では、境界のソトを批判することによって仮想敵（＝「文壇」や「出版者」）の存在をより強調してしまうというジレンマが生じたが、後者では「ウチ／ソト」という境界設定の非自明性を異化的な実践によって告発するという、より高次元の試みであったと評価できる。

・〈第二部〉

〈第二部〉では、彼らが「変態」や「談奇」といった独自の概念を運用しながら、趣味的研究を媒介とした共同性を形成し、それが地下出版空間として自律化していく様を論じた。まず第4章では雑誌『変態資料』を中心に、教養主義的な価値に対して「悪趣味」な対象、素材を称揚し、それらを「研究」と称して価値転倒させることで、「真の教養」や卓越性を示す出版人の振る舞いを明らかにした。つづく第5章では、艷本叢書類のパンフレットにおける「円本」批判言説を検討した。彼らは大衆的教養のシンボルである円本を批判し、書物の「モノ＝オブジェ」としての性質に執着することによって、愛書家としての“あるべき書物像／読書観”を提示したのである。こうしたアピールもまた、岩波的教養主義者とは異なる角度から、新興の大衆的読者に対して差異化する実践（＝「知識人読者」、さらには「愛書家好事家」という卓越性）

であったことを指摘した。

さらに第6章から第7章では、出版検閲の強化が推進されるなかで、梅原北明とその周辺の出版人がいかなる応答をみせたのかを論じた。その際に留意したのは、彼らの振る舞いを単に「権力への抵抗＝反権力」に終着させることなく、発禁をも狡猾に利用していく強かさや権力と共存、共犯していく複雑性をそのままに捉えていくことである。そこで明らかになったのは、生真面目な抵抗ではなく、発禁の付加価値化や国外逃亡にみられる劇場的なパフォーマンス性である。とくに第6章では彼らが「談奇」という造語によって共有した価値観と、それに基づく東アジア圏へのまなざしを検討した。当時の中国の文化風俗に精通した「シナ通」も巻き込みながら、彼らは「上海／支那」を、ある種失われた「浅草」的なものとして理想化していたこと。そして「前近代性」的な「異／奇なるもの」（土俗、怪奇、獵奇性）へと向かう知的好奇心が、グロテスクという共通性において「江戸」と「支那」をパラレルなものとして捉えていたことも見えてきた。それは当時のモダニズム文化における野蛮主義（バーバリズム）と根を同じくする、いわば「近代国家日本」という優生意識が東アジアや南アジアの文化的未開性に向けたオリエンタリズムの眼差しを含むものでもあったことも指摘しなくてはならない。

・〈第三部〉

そして〈第三部〉では地下出版界が成熟し、さまざまな要因が複合しながら衰退していく様子に迫った。第7章では軟派出版界の最期を飾ったとされる雑誌『談奇党』にフォーカスし、彼らの批判の矛先が検閲制度から、大衆化した「エロ出版」へとシフトしていたことを論じた。

『談奇党』の主幹であった花房四郎はプロレタリア文学者・中野正人の別名であり、梅原北明とは雑誌『文芸市場』時代から二人三脚で活動してきた人物である。検閲による弾圧が強まるなかで、彼らは自身が携わってきた出版活動を「軟派出版史」として歴史記述化し、さらには新興の通俗的エロ出版を強く弾劾することで、自らを軟派出版界の「正統」として価値づけていった。過去には文壇や岩波文化といった「正統文化」を檣玉に挙げた彼らだが、終焉を前に、自らを軟派出版界の「正統」へと自己指定せざるを得なかったというアイロニーが観察される。

そして第8章では、戦後の文化に戦前の軟派出版人脈がどのように受け継がれ、そして消えていったのかを検討した。戦前に「文献派」を自称した彼らにとって「文献＝他者」であった「変態」は、戦後のマニア雑誌において「当事者」として表象されるに至った。しかし1950年代以降の悪書追放運動にともなう不良雑誌排除の機運が強まるなかで、こうしたマニア向けの雑誌もまた弾圧されていく。また1960年代のアングラの文化や文化批評家のなかでも、梅原北明や酒井潔、高橋鐵といった戦前の地下出版人脈がすくなく影響を与えていたことが分かった。しかし、1975年の『奇譚クラブ』の終刊が象徴するように「知的エロ」の系譜を支えた“裏通りの教養”は、おもて面の“教養主義の没落”、すなわち「知性」への信頼や憧れという絶対的価値の衰退を前にして、同時に居場所を失っていくこととなった。

各章で論じたとおり、「地下出版界」の栄枯盛衰には、つねにオモテの文化としての啓蒙主義的なコンテクスト（「岩波文化／講談社文化」的なもの）が表裏一体の形で言及、ないし意識されていた。そこには啓蒙文化への反発だけでなく、教養という文化資本と、それが支配する象

徴暴力空間を共有する地盤があった。以上、1925年から1933年頃、「地下出版界」と名指しうる程度には自律し、成熟した「場」の存在が観察できた。市井の学というべきアカデミズムの外部における学的共同体の成立を論じたこと、それが従来看過されてきた「軟派出版」の領域においてなされたことを示した点に、本研究の学術的な認識利得がある。